11	雫石	(692)2059	きんたいち	(27)3035	軽米	(46)2207	田山	(73)2349	葛巻	(66)2731
11	巣子	(688)4080	御返地	(26)2622	九戸	(43)3666	川口	(65)2009	江刈	(68)2440
33	滝沢	(688)4519	浄法寺	(26)9977	大更	(75)1552	いわて沼宮内	(62)2228		
68	好摩	(613)8383	いちのへ	(33)2026	平舘	(68)7758	いわてまち	(62)1919		
22	にのへ	(22)1122	奥中山	(68)7751	安代	(72)3305	元木	(66)0319		

初冬種まき 高まる関心

初冬にコメの種もみをまいた田んぼで、栽培技術に関する説明を聞く参加者

滝沢で講習会 県内外コメ農家ら参加

初冬の田んぼにコメの種もみを直接まき、雪の下で越冬させる栽培技術に関する講習会が12日、滝沢市巣子の岩手大農学部付属滝沢農場で開かれた。春の作業負担を軽減できる同大発の稲作技術。高齢化と労働力不足に直面しながらも、食料生産の基盤となる田んぼを維持するため、農家が関心を高めている。

県内外の生産者や自治体職員ら約40人が参加。主催した同大農学部の下野裕之教授（作物学）らが、栽培技術の概要や作業の注意点などを説明した。

米作りの中でも、費用と手間がかかる春の育苗や田植えを省ける栽培手法。農家の高齢化や担い手不足への対策として、下野教授が2008年から研究に取り組み、実用化へ成果を積み重ねてきた。

負担軽減へ「選択肢に」

県内では既に、経営に取り入れている農業法人もある。31㌶の水田を営む八幡平市野駄の「かきのうえ」は、20年冬に60㌶で導入。育てた苗を春に移植するのと同程度の収量を確保できた。立柳慎光代表取締役(43)は「米価下落や高齢化で、今後引き受ける農地は増えていくだろう。少ない労力で、大きな面積を経営していく上での切り札になる」と見据える。

講習会に参加した紫波町西長岡の長岡西部農業生産組合の細川修一さん(67)も「耕す人が減っていく中で農地を維持するために必要な技術だと感じる。選択肢として組合で情報共有したい」とうなずいた。

下野教授は「収量を高めるため、適切な施肥や除草方法などの確立に取り組んでいる。新たな技術体系としてガイドブックのような形にまとめ、普及を目指したい」と力を込める。

（鎌田佳佑）

※岩手日報　令和4年7月13日付/19面　※この記事は岩手日報社の許諾を得て転載しています。